都道府県名　三重県

平成21年度　自閉症に対応した教育課程の在り方に関する調査研究事業　中間報告書

1　研究のねらい

特別支援学校西日野にじ学園では、従来から自閉症スペクトラムの障がい特性に配慮した支援や指導方法、教材作り等の実践を進めてきた。その実績を踏まえ、本研究では自閉症スペクトラムの障がい特性により配慮した授業作りや授業評価、教育課程はどうあるべきかを研究する。また教育課程の中の自立活動の「時間における指導」のあり方などについて、自立活動の時間を窓口にして、自閉症の特性に対応した指導と教育課程の編成などの研究を進める。さらに、近隣の小中学校との連携のあり方を研究する。

2　研究内容

- 知的障がいを伴う自閉症スペクトラムの児童生徒への様々な支援について、課題や成果を整理し、学習グループ編成や授業作りについて研究を進める（西日野にじ学園では、自閉症スペクトラムの児童生徒だけの学習グループ編成は行っていない)。
- 自立活動の「時間における指導」をどのように教育課程に位置づけるか等、教育課程について研究を進める。
- 特別支援学校での実践を小中学校に還元し、小中学校で実践できる自閉症スペクトラムの特性に配慮した指導内容や方法について授業を中心に実践研究を進める。

3　評価の方法

学校全体で自閉症教育に取り組むために教職員アンケートを実施し、現状を把握し今後の課題を知る。

研究授業を行い、その後の児童生徒の変容について話し合い、次の授業に生かす。

授業評価は、『自閉症教育実践マスターブック』（国立特別支援教育総合研究所　ジアース教育新社）の「授業シート」に基づいて行う。

4　研究経過

【西日野にじ学園】

1.　教職員アンケートについて

1）アンケートの目的

学校全体で自閉症教育に取り組むために、現状を把握し今後の課題を知る目的で教職員全体を対象にアンケート調査を行った。アンケート項目については『自

閉症教育実践マスターブック』の「学校全体で自閉症教育に取り組むためのチェックリスト」シートＡ・シートＢを使用した。（資料：アンケート結果）

シート A　調査期間　平成 21 年９月 14 日～９月 25 日　回収率　94.0%

シート B　調査期間　平成 21 年 11 月２日～11 月 13 日　回収率　92.2%

2）結果の分析について

ア　シート A

・授業作り：自閉症の理解、対応、支援については力量があるものの授業評価は、改善が必要である

・指導体制：自閉症支援の技法や方法については一定取り組めているものの、構造化や絵カードなどが形式的に用いられているケース等もあり、学校全体での統一や系統性のある指導、機会利用型指導の充実が課題である

・指導内容：自閉症の障害特性に応じた教育が必要であると全校的に認識しているが、自閉症独自の教育を実施している割合は低い

・保護者連携：保護者とのコミュニケーションはとれているものの、児童生徒の将来のビジョンを共有して個別の教育支援計画への反映は弱く、関係機関と連携した休日や放課後の支援、家庭や地域でのプログラムの提供などが今後の課題となる

イ　シート B

・教育課程：障害特性に対応した指導支援の共通理解があり、教育課程も工夫されているが、学部間で一貫性のある自閉症の障害特性に応じた指導内容や教育内容については不十分なところがある。

・研修：自閉症教育に対する研修は実施している。

・指導環境：環境設定については、生徒増により教室数確保等厳しい中、工夫して取り組めている。授業の準備時間がほとんど取れない状況であり、時間の確保が課題である。また、環境設定等の改善・充実を図る部署や機関が校内に必要である。

・関係機関連携：自閉症の教育について、小中学校への支援体制がある程度できている

2.　授業研究について

教職員が同じ観点で協議ができる評価のツールとして『自閉症教育実践マスターブック』の「授業プラン」と「授業シート」を使用した。児童生徒が自分自身で「理解して活動することができる」場面をより多く作っていくための授業内容の工夫、改善に取り組んだ。研究授業を年４回（小学部・中学部各１回、高等部２回）設定し、研究協議の中で三重大学教育学部准教授赤木和重先生より指導、助言をいただいた（内１回については 2 月下旬実施予定）。

1）第１回　高等部　平成 21 年９月 17 日（木）

ア　単元：調理をしよう「ジュースを作ろう」

イ　目標：自分の係仕事の役割を果たす

ウ　生徒について：高等部第２学年Ａ類型生徒　男子４名　女子１名

（内自閉症生徒３名）

エ　授業の流れ

本時の活動の確認

自分の係を知る

割り当てられた係仕事を行う

出来上がりを待つ

ジュースを飲む

好きなジュースをおかわりする

飲み終えたコップを流し台に持っていく

オ　授業シート

学校名：	三重県立特別支援学校西日野にじ学園	作成者	市川、入江、小泉
学年・教室	2年A教室	領域・教科名：家庭科	平成 21 年度
授業シート	授業名(単元名)：調理をしよう 第(6/7回) 2009 9 月 17 日	シート番号	6

● 授業のねらい（シラバス）（単元設定の理由、本単元のねらい等）

本学習グループにおいて、５人中３人が自閉症あるいは自閉症スペクトラムである生徒である。日々の学習活動において協力して、一つの活動に取り組むことが困難な生徒たちである。しかし、模倣や規則性に沿って活動できる場面が多く見られる。

本単元は、家庭生活で使用する調理器具の使い方や役割を知ることで、一人一人にある役割を知る機会になるように設定した。自分の家庭にある調理器具と写真とのマッチングを行い、どのような調理器具があるのか知る機会を設定する。調理器具を知ることができれば、調理器具の使い方や役割について、手順書あるいは視覚支援を使用し、理解していく。最終段階として、調理器具を使用し、実習することで器具を実際に使用に触れる。また、実習一つ一つの活動を役割分担して行う。協力して一つの活動をやり通すことで、一人一人の役割を知る機会となってほしい。

● 授業の流れ	観点	キーポイント	評価と改善点
● 始まり			
□ 1 あいさつをする	②	①	□ 1 きちんと体が前を向いている
□ 2 今日の授業の活動を確認する	②	③	□ 2 視覚支援を見ている
□			□
□			□
● 係り分担を確認する			
□ 3 自分の係りを知る	②	②	□ 3 静かに指示を聞く
□ 4 係り仕事の確認に応じる	②	②	□ 4 教員の問いに返事をする
□			□
□			□
● 係りの作業をする			
□ 5 割り当てられた係り仕事を行う	④	④	□ 5 係り仕事をする
□ 6 出来上がりを待つ	②	④	□ 6 姿勢よく座って待つことができる
□			□
□			□
● ジュースを飲む			
□ 7 ジュースを配る	②	②	□ 7 紙の通りに配れる
□ 8 いただきますのあいさつをする	②	①	□ 8 手を合わせていただきますをする
□ 9 おかわりをする	②	⑤	□ 9 飲みたいジュースをきちんと伝える
□			□
● 終わり			
□ 10 飲み終えたコップを流し台に持って行く	②	②	□ 10 コップを片付ける
□ 11 終わりのあいさつをする	②	①	□ 11 きちんと体が前を向いている
□			□
□			□

自閉症教育のキーポイント：	①学習姿勢　②指示を理解する、応じる　③自己管理能力（セルフマネージメント） ④楽しい結果を期待して活動に取り組む　⑤自ら何かを伝えようとする意欲と表現する力 ⑥模倣できる、観察できる　⑦課題解決の手がかりとなる刺激に注目できる
評価の観点（例）	①関心・意欲・主体性　②知識　③社会性　④技能

カ　事後協議の内容（抜粋）

＊視覚支援の為の写真が多すぎたのではないか。生徒がどこを見ていいのかわかりにくかったのではないか。

→同じ活動の繰り返しならば活動に慣れて理解できてくるので視覚支援の提示や方法に整理が必要

＊仕事ができることがねらいか、自分の仕事がわかって、自分から出て

くることができるのがねらいか。活動のポイントはどこか？
→自分から進んで出てくることがねらい

＊家庭科の授業だったが、ねらいは教科的な内容より、他の視点（自立活動的）におかれていた。教育課程の見直しも必要になってくるのではないか。

〈助言者より〉

＊生徒の「できること」の生かし方がもう少しあったのでは？
例：めくり式手順書を生徒にめくらせる。ジュースを配る。等
時間を与えることで、学習への理解、構えができる。

＊視覚支援の方法を整理してみては？
→より考える力、自立の心を伸ばせるのでは。

＊「安定した見通しの中に、ワクワク・ドキドキ（ゆらぎ）をつくる」
「またジュースか…」の飽きをひねる。混ぜてみてどうなるか。
材料でハッとさせる。
見通しがわかって「やってみたい」と思う。
→生徒が自分から動く。
考える力、イメージする力、社会性が結果として身につく。

＊ジュースを作り上げること、切る、搾る、入れる、飲むなど
１才半レベルを超えていれば可能。
役割を持たせ、責任感を持たせる。
「お前がおらんと、あかんねや～」の意識を感じさせる。

2）第２回　中学部　平成 21 年 10 月 13 日（金）

ア　単元：みんなで　たのしもう

イ　目標：・学年集団で活動できる。
・それぞれの社会性を高める。

ウ　生徒について：中学部第２学年　　男子１５名　女子３名
（内自閉症生徒 13 名）

エ　授業の流れ

始まりのあいさつをする
ゲームの説明・教員の模範
全員がイスに座る
イス取りゲームと係り活動
２グループに分かれ、ゲームと係り活動を交代で行う
ゲーム：全員分の椅子がある→２脚ずつ減らす→最後の一人まで行う
係活動：音楽係り、イス運び係、敗者誘導係、応援係
優勝者の発表・結果の発表
後片付け　終わりの挨拶をする

オ　授業シート

学校名：	三重県立特別支援学校西日野にじ学園		作成者	伊藤　有一	
学年・教室	作業室	領域・教科名：　学級活動	平成	21 年度	2学期
授業シート		授業名(単元名)：　みんなでたのしもう	シート番号	3-H1男	
		第(4/5回)　2009　10 月　13 日			

● 授業のねらい（シラバス）（単元設定の理由、本単元のねらい等）

・曲が終わるとみんなが座れるように空いているイスを教えてあげたり、譲ってあげたりすること
　ができる。
・勝敗がつくゲームでは勝とう（座ろう）として取り組み、負けても受け入れることができる。
・係の活動では自分の役割を果たし、褒められることで喜びを感じることができる。
・みんなで協力することを体験する。

● 今日の授業名[テーマ]：自分たちでイス取りゲームをしよう	観点	キーポイント	評価と改善点
● 説明を聞く			
□ 1 みんなと一緒に聞けたか	社会	①	□
□ 2 ゲームの内容が理解できたか	関心意欲	①	□
□			□
□			□
● 全員がイスに座るゲームをする			
□ 1 音楽に合わせて活動[立つ・歩く座る]できたか	関心意欲	②	□
□ 2 みんなが座れるように行動できたか	社会		□
□			□
□			□
● イス取りゲームと係活動をする			
□ 1 イス取りゲームができたか	関心意社	③ ④ ⑤	□
□ 2 仕事に取り組めたか	社会	③ ④	□
□ 3 雰囲気やゲームを楽しめていたか	社会	④	□
□			□
● 後片付け			
□ 1 自分で終わりにせず、次の仕事へスムーズに移れたか	関心意欲	② ③	□
□			□
□			□
□			□
●			
□			□
□			□
□			□
□			□

自閉症教育のキーポイント：	①学習姿勢　②指示を理解する、応じる　③自己管理能力（セルフマネージメント）
	④楽しい結果を期待して活動に取り組む　⑤自ら何かを伝えようとする意欲と表現する力
	⑥模倣できる、観察できる　⑦課題解決の手がかりとなる刺激に注目できる
評価の観点[例]	①関心・意欲・主体性　②知識　③社会性　④技能

カ　事後協議の内容（抜粋）

＊教員がモデル生徒になり、早く座れて嬉しい、負けて悔しいなどをあらわしてみるのは？

→一番初めの授業で試みた。授業の流れがぶつぶつ切れ、よい指導とはならなかった。

＊役割分担がしっかりされていた。（教員も、生徒も）初めて見た観察者の自分にもわかりやすい授業だった。役割分担の決め方は？

→毎回役割もグループ（赤・青チーム）も変えていたが、子どもたちが混乱した。（前時に）見通しが持てていた子（自分からできる子）に役割与えた。

＊自閉症の生徒にとって難しいとされる「集団活動」「ゲーム」の設定が、あってよかったのか？

〈助言者より〉

「困難ではあるけれど、無理ではない」

勝って嬉しい負けて悔しい等の感情は、育てていきたいところであり、また集団で育ちやすい。しかし、知的理解と感情の発達が、自閉症はバランスよく発達していかないことが多いので、集団の中で、どんな

手立てをとるかが大切である。
「感情」を楽しむ行動を具体的で客観的に評価する。
例　もう一回しようとする。盛り上がり場面時に笑顔で走る。
できたことを他の人の顔を見て、共有する。等
「いきいきしていた」という主観的な表現ではなく、行動で議論していく必要がある。
例　くす玉を割った時となりの人をみた。力が抜けた笑顔で過ごした。活動中教室にいられた。等
＊７つのキーポイントでは、社会性をどのように位置づけ、評価できるのだろうか？シートを基にしての話し合いはしやすいか？
〈助言者より〉
指導計画、支援計画を作る時と同様の、教員同士の話し合いが大切。
基本的には「（子どものレベルに応じて）わかる」＋「楽しむ」ような子どもの姿が多く見られた授業であった。
・「わかる」ことをくり返すこと
・くり返しの中に新奇さがあること「金色のくす玉」
→多くの生徒が注視していた。
・役割の明確さ、集団の多様さが豊かな人間関係を形成。
「自由な活動」だけでは、多様な人間関係は生まれにくい。
・先生たちの雰囲気作り
大人数だからこそ、効果的に発揮される雰囲気。
〈助言者より〉
発達的に年齢 3 歳以上の生徒には、もう少し感情部分を意識するような手立てがあったのでは。
・競争意識を強める。（赤チーム VS 青チーム）
・勝つと「ええこと」がある。例　きらきら王冠がかぶれる。
・所属意識を高める。みんなで勝つとうれしい。負けると悔しい。
発達的に年齢 3 才以下の生徒に勝ち負けは難しいかもしれない。その場合はねらいを変更する必要がある。
例　他者を意識する：他の子どもに寄っていく。できた時、一緒に顔を見る。等

3）第 3 回　小学部　平成 21 年 11 月 30 日（月）

ア　単元：「床の雑巾がけをしよう 」
イ　目標：・決められた課題をやり遂げる
・一人でできる仕事を増やす
ウ　児童について：男子 3 名（5 年生 1 名、6 年生 2 名）女子 2 名（4 年生 2 名）

エ　授業の流れ

雑巾を洗って絞る

スタートの位置につく

ゴールまで拭く

繰り返す

雑巾を洗う

雑巾を干す

「がんばったねカード」がもらえる

オ　授業シート

学校名：	三重県立特別支援学校西日野にじ学園	作成者	野口、福田
学年・教室	小H	領域・教科名： 生活	平成 21 年度
授業シート	授業名(単元名)： 床のぞうきんがけをしよう	授業形態：	学習グループ
	第(7 /8 回) 2009 11 月 30 日	総時数	8時間
		1コマあたりの授業時間 35分	

● 授業のねらい(シラバス)(単元設定の理由、本単元のねらい等)

自分の担当の範囲の床を端から端まで雑巾がけする学習を通して、決められた課題をやり遂げることを学びたい。

毎週末に取り組んでいる教室掃除において、机運び、掃き掃除、床の雑巾がけ、ゴミ捨てに取り組んできた。その中で雑巾がけは、みんなができる作業であり、好きな活動である児童が多い。しかし、注意が分散しやすく見通しが持てないまま、中途半端な雑巾がけで終わってしまっている現状がある。

９月には机拭きを取り出して学習した。最初ある児童は、机を拭くという意識が持てず、手元を見て机拭きができなかった。しかし、学習により日常的にも手元を見て机の端から端へと雑巾を動かすことができるようになる様子が見られた。床の雑巾がけは、机よりも範囲が広く見通しが持ちにくい。授業で取り組むことによって、目的意識を持ってできる仕事を増やしたいと考えている。

● 今日の授業名：担当の場所を雑巾がけしよう	観点	キーポイント	評価と改善点
● 今日の活動の説明を聞く。			
□ 1 今日の活動内容を理解する。	関心意欲	②	□ 1 ポイントを絞った説明が必要
□			□ 2
□			□ 3
□			□ 4
● 雑巾を洗って絞る。			
□ 1 雑巾を絞りやすいようにたたむことができる。	技能	⑤	□ 1 視覚支援に頼りながら4つにたたむことができた。
□ 2 両手で絞るための手の動かし方が分かる。	技能	⑤	□ 2 [illegible]
□ 3 バケツに雑巾を入れることから絞るまでの流れが分かってできる。	知識	②	□ 3 随時声かけが必要な児童もいた。
□ 4			□ 4
● 担当の場所を雑巾で拭く。			
□ 1 スタート、ゴールが分かって拭くことができる。	知識	⑦	□ 1 視覚支援を頼りに分かって拭くことができた。
□ 2 しっかり手をついて拭くことができる。	技能	③	□ 2 手をついて拭くことができた。
□ 3 担当の範囲を最後まで拭くことができる。	関心意欲	②	□ 3 Rは担当の範囲に印を置いてできた。
□ 4 ほめられることを期待して拭くことができる。	関心意欲	④	□ 4 [illegible]
● 雑巾を洗って干す。			
□ 1 雑巾を絞りやすいようにたたむことができる。	技能	⑤	□ 1 視覚支援に頼りながら四つにたたむことができた。
□ 2 両手で絞るための手の動かし方が分かる。	技能	⑤	□ 2 [illegible]
□ 3 バケツに雑巾を入れることから干すまでの流れが分かってできる。	知識	②	□ 3 随時声かけが必要な児童もいた。
□ 4			□ 4
●			
□ 1			□
□ 2			□
□ 3			□
□ 4			□

自閉症教育のキーポイント：	①学習姿勢　②指示を理解する、応じる　③自己管理能力（セルフマネージメント）
	④楽しい結果を期待して活動に取り組む　⑤自ら何かを伝えようとする意欲と表現する力
	⑥模倣できる、観察できる　⑦課題解決の手がかりとなる刺激に注目できる
評価の観点[例]	①関心・意欲・主体性　②知識　③社会性　④技能

カ　事後協議の内容（抜粋）

＊トレーの利用は、雑巾がたたみやすい工夫だった

＊待ち時間が長いので、バケツを増やす等の工夫が必要ではないか

＊課題達成後の強化について

強化子の提示のタイミングについて

達成感をどのように感じさせるか

〈助言者より〉

・「みんな一緒」だけが集団の授業ではない。「みんなちがうことをしていながら、同じ」という活動があってもよいのではないか。
・「待つ」必然性、「見る」必然性を考えること
・「待たせないこと」も大切
・具体的役割、行動をつくる中で、結果的にできたと思うことが大切
・意図的にかかわる場所を作り、つながりをつくり、子どもが結果的に見えるように。
・床を掃除する必然性がほしい

3．校内研修（各学部ごとの研修）について

1）高等部の取り組み

・教育課程について

＊自立活動について

目標の確認、指導の形態（教育活動全体を通じて行う指導と「時間における指導」等）について

＊現在の教育活動・教育内容について

自立活動の視点で各教科・領域を見直し、内容とねらいを確認

・授業研究について

＊各学習グループにおいて、授業シートを作成し、公開。

・支援ツール（情報交換）

＊スケジュールや、個別課題の教材、作業での支援グッズなど、アイデア光る生徒の個性に合った教材を教職員一人ひとりがまとめ、情報を共有。

2）中学部の研修の取り組み

・自立活動について

中学部での指導を自立活動の視点で振り返る。（取り組んでいる授業、充足度、問題点の洗い出し）。

1 回目：各グループ一人の生徒を取り上げ、取り組み内容を 6 区分を基に振り返る。

2 回目：各グループ 3 名の生徒を取り上げ、指導計画の重点目標を中心に取り組み内容を振り返る。

→自立活動の 6 区分の中で、取り組まれている項目数と、必要だが十分取り組めていない・取り組めていないとする項目数がともに多いのは、全体では「コミュニケーション」、自閉症のある生徒では「心理的な安定」と「人間関係の形成」、知的障がいのみの生徒では「身体の動き」となった。

・授業研究について

学年ごとに授業を設定し、指導案を検討した。ただし授業シートについては未実施。参観とビデオによる事後検討を行った。

1年生「掃除をしよう」

「ていねいに」「集中して」という個々のねらいの具体化、視覚支援、褒美の工夫

みんな一緒でなく、個々に合わせた活動

3年生「楽しく身体を動かそう」

自分から動く、難しい課題にチャレンジするには？

視覚支援、場の設定、教員の支援の工夫

3）小学部の取り組み

・自立活動について

現在行っている教科学習の中に含まれる自立活動の内容を探る

現在行っている教科学習と自立活動との関連について、内容とねらいを再確認する

教科「生活」と自立活動との関連についての研修

・各学習グループで「生活」について授業シートを作成し、授業研究を実施

研究授業をうけて、各学習グループでの授業改善に取り組んだ

・教育課程について

これまで「掃除」について漠然と教科等を合わせた指導の中で授業をしてきたが、教科等を合わせた指導では、特に自閉症の児童では、教科の内容に十分迫ることが難しいことが話し合われてきた。平成 21 年度は、「掃除」をはじめ、日常の生活動作などを教科指導（生活）で丁寧に指導することで、成果をあげた。また、教科指導に加えて自立活動の「時間における」指導を実施することで、さらに効果を上げることが期待される。特に自閉症児にとっては、曖昧になりがちである日常生活の指導は、「日常の生活指導」ではなく、「日常生活そのものを指導する」ことである。教科等で教えた内容を教科等を合わせた指導や生活の中で般化すると考える方が合理的であるという意見が出された。学校生活で般化した内容について家庭や社会で活かせることを目指して、平成22年度は自立活動の時間の指導について研究を進めていく。

4.　小学校・中学校での授業研究および本校との連携について

連絡協議会の中で各小中学校で自閉症支援について現在困っていることについて挙げ、改善策について協議する中で、本校の教職員が小中学校に行き、児童生徒の実態を把握し、本校でのこれまでの実践等から参考になる支援方法などを紹介し、各校で授業に反映する等実践中である。また、小学校・中学校で研究授業を行い、赤木先生より指導、助言をいただいた。

5.　教育課程の改善に向けて

西日野にじ学園では、これまで自立活動については、教科、教科等を合わせた指導及び総合的な学習の時間等の学校生活全体を通して指導を行ってきた。研究指定を受けるにあたり、各学部において各授業を自立活動の視点から見直しを行った。その結果、教科等の授業の中で「自立活動の指導」として学習を行っているが、自立活動の内容を十分押さえていないケースや内容の全てを学習しているために時間が不足しているケースがある。また、教科の授業であるにもかかわらず、指導内容や授業内容が自立活動にあたる時間を多く占めている、等の実態があることが浮かび上がってきた。そこで、平成 21 年度は、新学習指導要領で自立活動の内容が 6 区分になったことも踏まえ、自立活動の意義・目標・内容・ねらいについて各学部で学習する機会を持った。自閉的な傾向のある児童生徒には、「人間関係の形成」「環境の把握」「コミュニケーション」の指導内容を充実させていく必要性があることなどの意見が出た。平成 21 年度の取り組みを踏まえ、平成 22 年度はこれまで教科等で行ってきた自立活動の指導を「時間における指導」として編成し、実施していきたいと考えている。

【四郷小学校】

1. 西日野にじ学園との連携について

研究授業の前に、西日野にじ学園の教員による生徒観察・及び協議を行った。特別支援学級担当より、通常学級で、話し合いや発表の時場に合わない発言をしたり、友だちにしつこく大きな声で注意したりするなどの課題が挙げられた。コミュニケーションのとり方を支援学級で学習し、通常学級で適切な行動ができるように、

・絵カードを使うこと
・写真、デジカメ、動画で児童の様子を撮影し、本人に見せる
・自分で「ふりかえる」時間を持って自分の行動を反省する時間を持つこと
・一度にたくさんの内容を指導せず、一つ一つ教えていく
・授業の最後に「お楽しみ」を組み込むこと。「お楽しみ」には感覚統合的な活動が組み込めると尚よい

等、支援の方法を示した。また授業の組み立てに参考となる図書やアイディアを紹介した。

2. 授業研究　平成 21 年 12 月 14 日（月）

1）題材：「はっぴょうをするときは？」〈ソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ）〉
2）目標：・発表するときのルールを知る。
「自分以外の人が指名されたときは、声を出さず静かに聞く」というルールが分かる。
・実際の場面を想定した活動の中で、学習したルールを守って行動することができる。
3）生徒について：第 1 学年児童　男子 1 名

4）授業の流れ

この時間にすることの確認（頑張ったら楽しいことができることを知る）

絵カードを見て正しい行動の仕方を学ぶ

自分の普通学級の様子をデジタルカメラの動画で自分自身で確認する

実際に行動してみる

お楽しみのスクーターボード

5）事後の研究協議より（抜粋）

＊児童自身に振り返りをさせる際、デジタルカメラは有効であった

パソコンやテレビにつないだり、編集したりする必要がなく簡便である。モニターが小さいがゆえに、逆に集中するのではないか。

＊見学者を授業の中に組み込む手法はよかった

対象児童が一人ということもあり、ロールプレイなどの際、集団の確保が今後の課題である。その点、今回の研究授業の手法は、変化に弱いといわれる自閉症の児童にも「人が見にくる」という必然性が分かり、受け入れやすかったのではないか。

【笹川中学校】

1.　西日野にじ学園との連携

研究授業の前に連絡協議会の中で、笹川中学校特別支援学級担当より相談があった。支援学級の生徒１名（自閉症）が、体育祭前後からパニック（大声を出す、泣きわめくなど）がよく見られるようになり体育祭の後もパニックが起こっている。どのように支援をしていけばよいか、というケースである。それを受けて西日野にじ学園の教員による生徒観察・及び協議を行った。次に授業の様子の見学に行き、今後の支援について懇談を行った。そこで協議されたのは以下の通りである。

・自閉症のタイプとしては受動タイプのようである。従順に指示通り動くのでおとなしく、手がかからないように見える。受動タイプの方は嫌なことも嫌と拒否するより受け入れてしまうことや頑張りすぎてしまうのでストレスをためやすい。思春期に自我が強くなってきて、パニックになることも多くなるかもしれない。

・今後の就労、作業の場面を考えると、困ったときのヘルプサインの出し方や自分からの発信をしていけるコミュニケーションの仕方を身につけていく必要がある。

・ストレスをためている時のサインがあるはず。それを見逃さないようにしていくこと。あまり無理をさせない方がよいのではないか。

・指示理解は日常生活でのルーティン、習慣化しているような指示理解は良好だが、身振りや周りの動きで判断して動いていることが多い。それも生活するスキルともいえる。新しい学習や場面では、事前に何をするか、伝えてあげた方がよい。

・理解が難しい指示ややり直し、修正を求められることが続くと混乱すること

が予想されるので、具体的にわかりやすい言葉かけや視覚的な支援が必要。指示＋具体的に「やってみせる」モデリングの方法は何をするのかわかりやすい。体育の授業は先生や生徒のモデルがあってよかった。
・授業後、自分で休憩スペースに行ってリラックスしていたが、自分で調整しているのはいい姿なのではないか。
以上の協議を踏まえ、授業研究を実施した。

2.　授業研究　平成 22 年 1 月 19 日（火）

1）題材：「基礎体力をつけよう」
2）目標：・リーダーの指示によって活動することができる
・各メニューに一生懸命に取り組み、基礎体力をつける。
・元気に仲良く協力して活動できる。
3）生徒について：特別支援学級　第１学年生徒２名（男１女１）
第２学年生徒６名（男６）
第３学年生徒３名（男３）

4）授業の流れ
はじめの挨拶
今日の目標の発表（ランニングの周回数）
ラジオ体操第１
柔軟体操　腹筋運動
各種スキップ
ランニング
おわりの挨拶
5）授業後の研究協議
研究協議についても、自閉症のある児童生徒について中心に協議を行った。
＊生徒の変容について
１学期の持久走は 10 分間走を実施していた。いつも一番で走っていたので「頑張れ」といい続け、その期待にこたえるようにどんどん早くなっていった。家庭で「持久走ある？ない？」と聞くようになり、持久走が負担になっているようであった。２学期前半に不安定な時期が続いた。体育祭等で時間割の変更が多く、何をどれだけすればよいかが分かりにくかったこと、や持久走では「どれだけ走ればよいのか」が明確でなかったのではないかと考えられた。そこで、10 分間走ではなく周回数をあらかじめ決め、１周毎にボールを入れていくことで「終わり」をわかりやすくした。それにより現在、穏やかな表情で走ることができている。
＊身体の動かし方（体操の一つ一つの動きなど）を教えていく。「きっちり教え込まないとできない」ことがたくさんあるのではないか。
例）手洗い、ほうきの使い方、歯磨き、雑巾の絞り方など

日常生活場面では「なんとなくできている」ように
見えるが実はきちんとできていないことも多い。

＊モデルをはっきりさせる
誰を見るかをわかりやすくすること

＊終わりを示す重要性

＊Help サインを出せるように

＊授業のねらいと評価について
生徒の表情だけでは評価することが難しい
「達成感」「満足感」をどう客観的に評価していくのか

〈助言者より〉

＊直接的な言葉がけがちょっと多いのでは？
例）「○○くん、つぎ、美術！」
時間がある時、個別には、「疑問系質問」がいいのでは？
（例：次どうするの？／次の授業は５組？３組？）
教室の前にある予定表を子どもが見て動くようなことも必要なのではないか

＊「記録が伸びる楽しさ」を子どもに実感させたいなら、結果を書きに行く等先に目標を決めてもいいのかもしれない

＊友だちとの関わり（自閉症の生徒だけでなく全体を通して）
○「おれ、１１周！」
→友だちをみて「張り合う」姿がよかった。
○「あついなぁ」
→４人で一緒に「あつい」仕草をする。
友だちと一緒にいる楽しさがいい表情としてあらわれていた。
○自分より体格の大きい友だちの手をひっぱって走らせようとする姿
→みんなでがんばることの大切さ

【西日野にじ学園・四郷小学校・笹川中学校】

1．先進校視察について

自立活動を教育課程に取り入れ実践している特別支援学校、地域の小学校で自閉症のある児童生徒だけでなく学校全体で特別支援教育の取り組みを進めている学校等を中心に視察を行い、3校の教育活動に生かす目的で先進校視察を行った。

1）富山大学人間発達学部附属特別支援学校（西日野にじ学園）
視察日：平成 21 年 8 月 26 日
視察のポイント
自立活動の時間における指導の取り組み内容について
視覚支援・構造化について
教材教具の工夫について
小学部段階からの職業教育につながる取り組みについて

2）福井県立福井南養護学校（西日野にじ学園）
視察日：平成 21 年８月 27 日
視察のポイント
自閉症の児童生徒の教育課程、時間割、学習グループ編成等について
自立活動の時間における指導の取り組み内容について
自閉症の児童生徒の授業の中での支援について

3）高槻市立郡家小学校（西日野にじ学園・四郷小学校）
視察日：平成 21 年９月 30 日
視察のポイント
特別支援学級でのソーシャルスキルトレーニングについて
通常学級での般化に向けての取り組みについて

4）高槻市立五領小学校（西日野にじ学園・四郷小学校）
視察日：平成 21 年９月 30 日
視察のポイント
特別な教育的ニーズのある児童への支援について
特別支援教育の視点を取り入れた通常学級での学級経営・授業について
校内の研修体制について

5）自立活動研究フォーラム参加（西日野にじ学園）
参加日：平成 21 年８月 19 日
場所：上越教育大学
内容：・特別支援学校学習指導要領の改訂のポイントと自立活動の位置付けについての講演
・自立活動の指導についての実践紹介

6）滋賀大学教育学部附属特別支援学校（西日野にじ学園・笹川中学校）
視察日：平成 21 年８月 27 日
視察のポイント
高等部の教科「職業」について
自閉症の児童生徒への支援について
学習グループ編成について

2．経過報告及び研究協議会について
日時：平成 22 年 1 月 29 日（金）15:00～17:00
場所：三重県立特別支援学校西日野にじ学園　多目的ルーム
参加者：兵庫教育大学大学院教授 柘植雅義先生
県教育委員会特別支援教育室室長
四日市市教育委員会特別支援教育相談グループ長
西日野にじ学園職員
四郷小学校特別支援学級担任
笹川中学校特別支援学級担任

外部参加者 30 名程度

内容：・研究の概要・教育課程・西日野職員アンケート結果等報告
・西日野の取り組み（研究授業を中心に）小学部・中学部・高等部報告
・来年度の西日野の研究授業について
・四郷小学校での取り組み
・笹川中学校での取り組み
・今後の小中との連携について

研究授業を中心に今年度の取り組みを報告し、柘植先生に指導、助言をいただいた。「評価（授業評価、児童生徒の評価ともに）が十分ではない。評価が甘いということは、ねらいが曖昧だということにもなる」というご指摘は今後の研究の方向性を指し示すものであった。また、自立活動については、「どのような児童生徒に、どのような自立活動をしたら、どのように成長したのかが見えにくい」とのご指摘もいただいた。来年度、自立活動における時間の指導の中で、研究していきたい。小学校、中学校との連携では、コンサルティングのポイントを整理しておくことで、事業終了後も連携を続けていきやすくなるのではないか、と教えていただいた。この協議会では、管内の小中学校より 30 名程度の参加をいただき、情報共有ができた。来年度も報告会時に参加を呼びかけていきたいと考えている。

5　成果と課題

今年度、授業研究を重ねる中で見えてきた方向性が二つある。一つ目はどんな授業の集団を作るかということである。ただその場に一緒にいたり、待たせたりするのではなく、集団の中でお互いが良い影響を与え合う集団作りをめざしていくことが授業の大きなポイントになるということである。二つ目は児童生徒が、「わかってできる」「主体的に動くことができる」授業や生活を作っていくことが重要であるということである。学部を超えた教員間で研究協議ができたことは成果があったが、取り組みが研究授業日のみで終わってしまい、継続したものにはならなかったことが課題として挙げられる。そこで来年度は、各学部でそれぞれ対象とするグループを決め、自立活動の「時間における指導」の中で、ある期間継続して「授業シート」を作成し、対象グループの児童生徒がどのようにかわったかを追跡したいと考えている。

また、小中学校では特別支援学級の担任が課題としているところなどを連絡協議会を通して特別支援学校に伝え、実際に授業研究を行うことができた。従来の地域支援のモデルは、児童生徒の行動支援、ケース検討という視点から行われることが多かったと思われる。本研究においては、連携の核は「授業を共に考える」という手法である。この形を作ることができたのは成果であると考えている。授業研究を実施することで、小中学校の授業を支援学校の教員が見に行くことができ、今後の連携の一つの在り方になるのではないかと考えている。

6　今後の展望

特別支援学校に在籍する児童生徒の課題は様々であり、卒業後を見据えた指導や支援を考えたときに、一人ひとりにつけておくべき力はそれぞれに違う。それらを自立活動の「時間における指導」の中でどのように取り組んでいくのがよいのかについて方向性が出ているわけではない。実践する中で、内容・形態ともにどのようなものが効果的なのか、一人ひとりの児童生徒の目標の設定について、一貫した系統性のある自立活動の指導内容についてなどを研究していきたいと考えている。教育課程としては自立活動の「時間における指導」の時間数、時間帯などについて実践研究する中で検討していきたいと考えている。

また、小学校中学校との連携では、授業研究を四郷小学校・笹川中学校だけでなく、市内の小中学校にも広げていきたいと考えている。